

- オ 難病対策
- カ 歯科保健医療対策
- キ 血液確保対策
- ク 医薬関係
- ケ 医療に関する情報化
- コ その他

第4章 将来の保健医療提供体制の姿と医療計画による事業の推進

- 第1節 医療計画の周知と情報公開
- 第2節 数値目標の設定
- 第3節 医療計画の推進体制と役割
 - 1 都道府県
 - 2 市町村
- 第4節 数値目標の進行管理
 - 1 進行管理の方法
 - 2 進捗状況の広報・周知方法

第5章 保健・医療・介護（福祉）の総合的な取組

- 第1節 保健・医療・介護（福祉）の連携
- 第2節 健康づくり運動の推進
- 第3節 高齢者保健福祉対策
- 第4節 障害者保健福祉対策
- 第5節 母子保健福祉対策
- 第6節 保健福祉施設の機能強化

第6章 健康危機管理体制の構築

- 第1節 健康危機管理体制
- 第2節 医薬品等の安全対策
- 第3節 食品の安全衛生
- 第4節 生活衛生対策

4. 二次医療圏医療計画目次案

都道府県医療計画が策定された後、又は同時に二次医療圏ごとの医療計画が策定されることが望ましい。特に、第五次医療法改正による、地域医療の機能分担、連携、地域完結型医療による医療資源の選択と集中を推進するためには、二次医療圏内での患者・住民の意見聴取と医療者同士の情報交換の場が必要となる。また、都道府県というマクロな視点から、二次医療圏という、よりミクロに近い(メゾの)視点で検討するため、将来の人口推計から地域の疾病構造推計を実施し、地域の実態に応じた計画を策定することが望まれる。

【 二次医療圏医療計画目次案 】

第1章 総論

第1節 計画の基本理念

第2節 計画の性格

第3節 計画の期間

第2章 二次医療圏の現状等

第1節 人口

第2節 医療資源

第3節 受療行動

第4節 将来人口推計並びに疾病構造推計

第3章 各論(現状と将来人口推計に基づく二次医療圏に必要な医療資源等)

第1節 生活習慣病等の治療又は予防

- 1 がん (注:以下の項目は4事業に対応させる。)
 - ・ ライフコースに応じた医療機関名簿 ・ 現状分析
 - ・ 機能分担と連携 ・ 目標値

2 脳卒中

3 急性心筋梗塞

4 糖尿病

第2節 小児救急を含む小児医療

第3節 周産期医療

第4節 救急医療

第5節 災害医療

第6節 へき地医療

第7節 在宅医療

第8節 その他

第4章 安全対策

第1節 地域健康危機対策

第2節 医療の質の向上と安全対策

【在宅医療の項目の配置について～福岡県の実例より】

○国の示すモデル医療計画では、5事業の次、すなわち「へき地医療」の次に配置されているが、福岡県では、在宅医療が多くの疾患に対応しており、かかりつけ医等の施策に関連が深いことから、4疾病より前に配置している。

5. 医療計画作成に当たっての必須資料

二次医療圏、基準病床数等の設定において必要となる以下のようなデータの収集を行う。なお、3)については、現況把握における指標として活用可能と考えられるものである。

1) 実態把握を行う際に活用できる既存公的統計

ア 疾患別の受療率、推計患者数、在院日数等をみる場合

A. 「年齢別・町丁字別人口」：出典 各都道府県

B. 「患者調査」：出典 厚生労働省3年に1回実施（入院票、入院外票、退院票）

・最新版は平成17年10月18日～20日（火～木）の3日間のうち医療施設ごとに指定した1日に対象医療機関を受診した患者の実態を調査（入院、外来）。診療所については、平成17年18（火）、19日（水）、21日（金）の3日間のうち診療所ごとに指定した1日とした。・退院患者票は平成17年9月1日～30日までの1か月間に対象医療機関を退院した患者の実態を調査。

・抽出率：施設数 病院入院7.3/10、外来3.8/10、一般診療所6.5/100

C. 平成20年4月1日現在の介護老人保健施設及び指定介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）の定員数：出典 都道府県

イ 医療施設の施設整備、機能の実態をみる場合

A. 「医療施設（静態）調査」

・最新版は平成17年、10月1日付けで開設している病院、一般診療所、歯科診療所を全数調査。

B. 「医療施設（動態）調査 病院報告」（患者票、従事者票）

・患者票は毎月、従事者票は年1回10月1日に調査。全数調査。

・「平成19年医療施設（動態）調査 病院報告」が最新。

ウ 診療行為からみた医療需要、提供実績をみるには

A. 社会医療診療行為別調査（上、下巻、薬剤調査）

- ・最新版は平成19年、3年に1回、6月審査分のレセプト・データ（医科、歯科、調剤）を入院、入院外について調査。
- ・抽出率は病院では約1,200件/8,800件、レセプト数116,000件程度
- ・年齢、性別、傷病名、受療した医療機関等別に診療行為別の実施回数、日数、点数等を集計。

B. その他

- ・「国民健康保険の実態」（国保の給付実態を市町村単位で把握できる）、「医療経済実態調査」（3年に1回診療報酬改定の前に実施。医療機関の収支状況、資産・負債、従事者状況等を把握（病院、一般診療所、歯科診療所、保険調剤薬局が対象）。

*

・各都道府県国民健康保険団体連合会「レセプト・データ」
 （住民の医療需要量を把握（年齢別・傷病別の訪問診療もしくは往診料が算定されているレセプトの発生率等から在宅医療の利用者を推計等）に活用できる。

2) 都道府県独自調査資料

ア 疾患別の受療率、推計患者数、在院日数等をみる場合

A. 都道府県独自調査による「患者調査」

- ・国の調査で把握されている対象患者数が少ないという欠点を補完するため独自実施。医療計画策定の2年前くらいから着手することが多い（対象、調査項目等はそれぞれ）。
- ・基準病床数算定時に二次医療圏内外の患者流入の実態を把握することが主な目的である。

イ 医療施設の施設整備、機能の実態をみる場合

A. 都道府県独自調査による「医療施設（機能）調査」

- ・通常は医療計画策定の2年前位に、都道府県下の医療機関（病院）を全数調査することが多い。
- ・調査内容は、疾患に見た提供可能な医療機能、治療実績、対応可能な病気（重篤度）、今後の機能拡充の方向性、課題等。

【在宅療養支援診療所654か所の悉皆調査を実施した実例より】

- ・在宅医療を提供するに当たって中心的役割を担うことが期待されている在

宅療養支援診療所を対象に、新規に調査を実施した。

- ・在宅療養支援診療所の医療機能等を把握するために、その活動状況を主眼に設計した。

ウ 地域住民意識を指標とする場合

A. 都道府県独自調査による住民意識調査

- ・各都道府県の政策目標の達成度や住民の意識及びニーズの把握を行うために、定期的にモニターを募集・調査することが多い。

【本研究に当たって実施した住民意識調査に関する考察点】

- 今回は、供給側の現状把握を主に行ったが（供給側の調査は比較的实施しやすく、国等によっても多く実施されている）、本来需要側の在宅医療に関する意識、ニーズの把握も必要である。今後県民意識調査を実施する等の手法で、現況をとらえる必要があると考える。
- 県民の生活に極めて関連の深い医療の分野においては、少なくとも計画期間である5年間をスパンとして意識調査を実施するのが望ましく、社会情勢に変化や施策の効果を反映して、現況がどう変化しているのかを常に把握する必要もある。
- 県民の意識調査については、利用者・対象者（例えば在宅医療による訪問診療を受けている患者・家族）と一般県民（利用している、いないに関わらず広く県民一般という意味）に分け、目的に応じた調査法を選択、実施する必要がある。県内の医療圏等の区域による違いを見たり、他都道府県と共同実施を行い双方の違い・傾向を見る手法も考えられる。

3) 都道府県独自調査の際に活用可能で病院が既に保有していると思われる資料

ア 医療施設（病院）の経営基盤の安定性、継続性、経年変化を把握するには

A. 決算書（過去5年分）

- ・医療法第51条に基づき、医療法人については、毎会計年度終了後、2ヶ月以内に都道府県知事に届け出ることとなっている。

B. 診療実績推移（過去5年分）

- ・入院患者数、外来患者数、入院/外来別医業収益、平均在院日数、紹介率等。
- ・詳細に把握するには、診療科別等の統計である方が望ましい。

イ 医療施設（病院）が保有している機能を把握するには

A. 現況報告書（地方社会保険事務局提出資料）

- ・「基本診療料の施設基準等及びその届出に関する手続きの取扱い（保医発第 0306002 号）」第 3（届出受理後の措置等）の 4 に定める、保険医療機関が地方社会保険事務局に対して毎年行う 7 月 1 日現在の報告。
- ・同第 3 の 5 には、「地方社会保険事務局及び都道府県においては、届出を受理した後、当該届出事項に関する情報の交換を行うなど、相互に協力するよう努めるものとする。」となっている。
- ・当該資料には、各種施設基準の届出状況、院内感染防止対策等の状況、医療従事者の確保状況（名簿）、入院基本料、リハビリテーション等の実施状況等に記載されている。

B. 施設基準一覧表（最新分）

- ・7 月 1 日以降、新たに届け出たものを含む、最新の施設基準。

ウ 医療施設（病院）が発揮した機能を把握するには

前項 A. 「現況報告書」で把握できない各種診療実績については、各医療施設から診療報酬請求実績について提出を求めることが考えられる。具体例として、以下に例示する。

A. 技術度別手術実施件数（過去 1 年分）

- ・『手術報酬に関する外保連試算・第 6 版』（平成 17 年 11 月・外科系学会社会保険委員会連合）の技術度分類に基づく手術実施件数。

B. CT・MRI 利用状況等（過去 1 年分）

- ・各種（高額）医療機器の利用状況を機器ごとに把握する。

※ 参考：以上の調査により下表の指標（臨床指標以外）設定が可能となる。

概念	指標	出典	摘要
どれだけの収益力があるか	売上高経常利益率	決算書	都道府県提出
経営の安定性はどうか	自己資本比率	〃	〃
病院の機能の把握	病床数	現況報告書	社会保険事務局提出
〃	病棟区分	〃	〃
〃	診療科	〃	〃
どれだけの患者が入院しているか	平均在院日数	〃	〃
〃	入退院患者数	〃	〃
看護状況の把握	看護基準	施設基準一覧	社会保険事務局提出
どのような入院患者を診ているか	特定入院料	〃	〃
どのような診療行為を行っているか	入院基本料等加算項目	〃	〃
高額医療機器の保有状況の把握	CT、MRI等の台数	高額医療機器一覧	決算附属書類（固定資産台帳）

高額医療機器の使用状況の把握	上記の利用件数	〃	〃
診療科ごとの医師数の把握	診療科別医師数	診療科別医師数	常勤換算数
どのような入院患者を診ているか	疾病別患者数	入院患者疾病構造分布 (ICDコーディングされた入院患者統計)	診療録管理体制加算算定病院は社会保険事務局へ提出
連携状況等の把握	退院先一覧	退院サマリー	
平均単価の把握により医療提供水準の把握	入院・外来別平均単価	レセコン等	
〃	診療科別・病棟別平均単価	〃	
療養病棟の患者の状況	医療区分・ADL区分別患者数		医療療養病床を有する病院のみ

6. 現況把握及び目標管理のための指標の設定

[現況把握～事業評価までのフロー図]

既存諸調査による現況把握[(6)1による情報収集]

新規調査による現況把握[(6)2による新規調査その他独自指標]

* 医療計画策定必須資料を利用するとともに、現在とれる指標から現況を把握する。

↓ 分析 (分析手法は今後の課題)

現況に関する指標の抽出

分析 (全国との比較等) → ↓ ← 課題の抽出

対応した目標の設定・目標値の設定

↓ ← 既存施策・事業の見直し・新規事業の検討

施策・事業 (計画の推進の方策) の立案

↓ ← 施策の実効性の確認

医療計画の執行管理・評価

【現況把握等の具体的方法の事例】

- 本研究で策定した計画においては、在宅療養支援診療所の悉皆調査を実施し、現況把握のみならず、目標値の設定、施策の立案、情報提供のツールとして、計画全体に活用した。今回の調査内容及び調査結果の提示は、その一例。
- 予算とマンパワーを投じ、また多忙な医療機関に協力を得ながら実施する調査を行うに当たっては、調査の設計と活用方法を十分検討しておく必要がある。
- 在宅医療においては、在宅医療を提供する機関として、本来は在宅療養支援診療

所のみならず、県内の全医療機関を把握するのが望ましかったのであるが、本研究においては、予算、マンパワー上の問題等から在宅療養支援診療所に絞り、その限られた情報の中で全体を把握し、施策を検討することを選択した。

※二次医療圏ごとの医療提供体制の現況把握、目標値の設定等に関し、医療機能に係る医療機関の情報等を活用した分析手法の開発については、今後の課題となっているが、指標の設定等に関しては、以下のとおりである。

1. 指標の設定

- 医療機能の現況や目標値の設定のために、国・都道府県・市町村・その他機関が収集した情報を有効に活用（既存データの整理）するとともに、新たに必要と考えられる情報については、関係機関から入手し、若しくは新たな独自調査等を実施する。（5）には、公統計資料と医療機関が所有する情報を例示している。これらの多くは基準病床数の算定や他の目的に利用していたデータであるが、今後必要な加工等を行うことで、指標としても活用できないか検討中である。

このほかに、臨床指標や経済・社会・産業に関する指標等も考えられる。全国的に比較可能な指標（国が H18～H19 にかけて大規模な医療機能調査を実施済み）の他に各都道府県及び二次医療圏独自の指標を検討することが計画策定を行う上で、その実効性や費用対効果を住民に説明するためにも重要な作業の取組みのひとつであると考えられる。

- 現況の把握及び目標値の設定〔(6)に記述〕に関する指標値については、透明性の確保と説明責任を意識したものとする。留意点としては、
 - 翌年度以降において評価を行うことができるよう、できるだけ数量化する。
 - 目的を明確化し、目標ごとに対応した形で指標を設定する。
 - 住民の視点に立った評価を行うための指標を組み立てる。
 - 主要な事業（疾患ごと）の分類を試みる。

※ 新医療計画では、都道府県は原則として地域の中で必要な保健福祉医療サービスが完結できるよう 4 疾病及び 5 事業※ごとの医療提供体制を構築することとされている。具体的には、地域の医療機関相互の機能分担と連携の下で、適切な医療サービスが切れ目なく提供されるようにするため、期待される医療提供体制の水準の数値目標やその達成のための具体的方策を医療計画で明らかにすることとされている。

<4 疾病・5 事業>がん対策、脳卒中对策、急性心筋梗塞対策、糖尿病対策、
小児救急を含む小児医療対策、周産期医療対策、救急医療対策、
災害医療対策、へき地医療対策

【数値目標・指標の設定について】

- 医療法において数値目標の設定が求められたのは4疾病5事業のみであったが、本来の行政計画の管理の視点においては、全ての事業分野において定量化できるものは数値目標を設定することが望ましい。
- 平成19年度に実施した在宅医療分野の策定の研究においては、まさに4疾病5事業以外である「在宅医療分野」においてアウトプットに関する数値目標の設定及び関連した施策の数値目標例を提示している。

2. 指標設定の例

・ 病期に(ライフコースアプローチ)基づく指標の検討

収集可能な指標について、疾患ごとにどの病期において、また医療の質を見る上で何に(提供体制か診療の過程かなど)課題があるのかを判断する材料を集めることが主眼として以下のマトリックスに具体的な指標、あるいは代替指標を挿入して検討すると整理しやすい。

この分類によって、目標へのアプローチが明確になり、評価・事業の組み立てる上で役に立つ。^{*} また、設定目標相互の関連性も把握することが容易となる。

もともと、複数の組み合わせによるこの全ての項目に該当する指標がそろわない可能性もあるので、その部分については、定性的な概念を用い、策定・評価に係る審議会の意見を求めることで、代替的指標・評価を行うことも考えられる。

疾病、病期、各指標のマトリックス

(例)主要4事業		病期(ライフコースアプローチ)					
		急性期入院医療		回復期 リハビリテ ーション	慢性期 入院医療 (維持期リハ)	在宅療養+ 在宅介護	終末期医療
		救急医療	救急医療を 必要としない 急性期				
がん	Structure						
	Process						
	Outcome						
脳卒中	Structure						
	Process						
	Outcome						
急性 心筋 梗塞	Structure						
	Process						
	Outcome						
糖尿 病	Structure						
	Process						
	Outcome						

*

【重視する指標 ～ 各都道府県の保健医療計画の実例】

- ・アウトカムからの評価には限界があるため、治療のプロセスからの評価を重視する考えがある。
- ・今医療計画においても「t-PAによる脳血栓溶解療法実施症例数」の増加を数値目標として設定している事例（岡山県、大分県）がみられるように、治療のプロセスに着目した数値目標が設定されていた。
- ・その一方で、県民の主たる関心は最終的にどのような成果がもたらされるかということと、平成20年の診療報酬改定では回復期リハビリテーションについてアウトカム評価が試行的に導入されている。
- ・このようなことを踏まえると、今後、プロセス指標に関するものが多くなっていくことも予想されるが、行政としてはアウトカム指標を中心とする数値目標体系を構築していくことが求められると考えられる。

7. 課題の抽出・目標値の設定

① 課題の抽出

(5) で選定した指標を整理する中で、策定する医療計画の中で解決していくべき課題を抽出する作業を行う。課題の抽出に当たっては、都道府県事務局案を策定審議会に諮るとともに、併せてできるだけ住民の意見を取り入れる機会をつくることが求められる。この場合、上記例に従って考えると、現況把握の際利用する病期に応じたライフコースアプローチによるマトリクスの構造に合わせて整理する。

② 目標値の設定

目標値は、現況把握を行う指標群から、各課題に応じて、それぞれ対応する指標を選定し、それに対応した目標について値を設定する。

指標群 → (抽出した課題に対応) → 指標の選定 → (実行可能性の確認)

→ 目標の設定 → 目標値の設定

目標値の設定の例は次のとおり。

- ◇ 全国調査によるデータが入手可能な指標
全国平均値、全国中央値を目標値とする。
5年間で〇〇%数値を上げる、下げる。
- ◇ 独自調査を行うもの
次回調査時に現況を〇〇%向上させる。

- ◇ 過去の経年変化が分かるもの
次回調査までに伸び率を〇〇%減少させる。

【目標設定の考え方～各都道府県の保健医療計画の実例】

◇ 近隣都道府県との比較

兵庫県においては、脳卒中の年齢調整死亡率について、生活習慣や生活環境が類似している近隣の大阪府並に引き下げるとする目標を設定している。

◇ 例示

沖縄県においては、救急医療用ヘリコプターの導入によって病院収容時間の短縮をあげ、栗国島の現状 145 分を 55 分に短縮とする例示を明示している。

【目標設定の考え方～福岡県保健医療計画（在宅医療分野）の実例】

- 医療計画のある分野におけるアウトカム指標を検討に当たって
 - ・在宅医療においては患者満足度、治療成績といった、いわゆるアウトカムを図るべき数値を入手することが困難であったことから、代理指標としてアウトプット指標を使った。
 - ・すべての分野においてアウトプット指標を使うことを適当ではないと考えるが、在宅医療等、県民のニーズと供給量において明らかなギャップがあるような分野においては、代理指標の活用を行うことが許されるのではないかと考えた。
- 目標設定のラインの検討
 - ・目標とすべきラインは、政策者が行う諸推計等からある一定の数値を当然に導き出すことが難しく、施策のメニュー、その実現可能性を見込む中で、あるべき幅の中で検討する方法もあり得る。
 - ・本研究で示した・需要ベースでみた量と、供給者側が回答している内容から推計した量の幅の中で、施策の実現可能性等を勘案しながら目標値の設定を行うという手法を一例として示す。

8. 施策の立案（実施する事業の整理）

課題の抽出を行い、あるべき姿を念頭に、今後 5 年間で実行可能な範囲での目標値の設定を行うとともに、施策・事業の立案を行い年次毎の計画を立てる。

この立案に際しては、数値目標の達成に連動するよう配慮することが必要である。

【施策の立案～福岡県保健医療計画（在宅医療分野）の実例】

○計画期間内に在宅医療において県が何をすべきかを検討するに当たって、その方向性（柱立て）を次のとおり考え、その方向性のもとに関係施策を構造的に網羅する形でまとめた。

なお、②は在宅療養支援診療所調査において得られた結果を反映した。

- ①需要・供給推計にみる今後の対策として、供給量を増やすことのできる体制の整備（供給量を増やすこと）
- ②患者・家族の負担の軽減、在宅医療に関する状況の提供

既に関連の事業を実施している場合は、事業の統廃合を視野に入れた事業実施方法の見直しを行う。過去に政策評価を実施している事業については、事業効果の出していない原因について分析を行う。その場合、複数の視点から、政策評価担当部課を交えて検証を行うことが必要である。また、必要に応じて計画策定委員会等に諮問する等専門家の意見を聞くことも有用である。さらに、住民アンケート等による住民の意見の聴取も重要である（住民の意見を取り入れる方法等については今後検討する予定である）。

*行政評価の視点

- ・ 予算規模は適正か ・ 配分は適当か ・ 事業主管部課は適当か など
- ・ 既存事業で効果が得られていない場合や、新しい課題に対応するために新規事業の立案が必要な場合は、今後5年間での目標を明確にし、そのために必要性を十分整理し、部課内で必要な予算措置等を行う。また、年次ごとの事業計画を立てるに当たっては、単純に5年間同規模での事業を計画するのではなく、必要な配分を見積もること。

*予算の年次配分

- ・ 計画期間内で最大の効果を上げるためにはどの年次に力点を置くべきか、計画期間内での効果如何によってはどのように配分を変更するか等を前もって考えておく。
- ・ 限られた予算内で最大の効果を上げるためには、数値化した指標を用いて、実施事業単位での事業効果の測定に加え、既存事業等で計測に適した事業については、必ず費用対効果を併せて算出する。施策の効果を上げるための事業の選択、事業間の予算配分を行う上での比較検討が必要である。また新規事業であっても事業の採用にあっては、議会・住民への説明責任の履行の視点から、計測できる範囲で費用対効果を見積もることが重要である。
- ・ 財政所管部局への予算要求に際しては、各施策・事業の医療計画における位置づけを示すことができるよう整理しておく。計画目標の達成のために必要な事業と

して、期間内の要求年次の事業費の根拠に係る理由も整理すること。なお、医療計画関連の施策・事業の毎年度の予算事務をスムーズに行うためには、計画策定時において（特に実施計画レベルで）財政担当部局の合意を得ておくことが望ましい。

- ・事業の予算計上にあつては、国庫補助金その他特定財源が見込まれる事業については、それらの申請に必要な実施計画も併せて策定し、中長期的視野での実効性を担保すること。

第3節 医療計画管理マニュアル

通常、自治体は、長期総合計画という枠組みの中で、「基本構想」－「基本計画」というものを策定しており、その計画期間は概ね10年程度である。さらに基本計画を具体化するものとして、概ね3年程度の「実施計画」を策定しており、実施計画において具体的事業を掲げ、かつ進捗管理を行っている。

医療計画は、これら基本計画と実施計画の中間的な存在である。それは計画期間が5年であるのみならず、その性格が議会の議決こそ必要としないものの、知事の公約や理念を反映する重要な地域ビジョンを示すものであると同時に、具体的施策の提示も想定する性質の計画であるからである。

医療計画は、基本計画と実施計画に分けて策定する方法もあり得る（第3章第1節作成マニュアルでは分離していない）。本管理マニュアルにおいては、この実施計画に相当する主に事業・施策の進捗管理を主眼として作成した。

医療計画の策定から実施までの流れとしては次のとおりであり、本管理マニュアルでは、計画を実効性あるものとするための、④、⑤に相当する管理方法を示している。

- ① 主要な疾病・事業ごとの医療機能の把握
- ② 適切な保健医療提供体制の明示と将来の姿を志向した数値目標の設定
- ③ 数値目標を達成するための実行計画としての医療計画の立案
- ④ 立案した医療計画に基づく事業の実施
- ⑤ 事業実施後の客観的な政策評価による医療計画の見直し

1. 医療計画の管理に関する関連規定、参照資料等

1. 医療法第30条の4第2項・第30条の6

都道府県は、医療計画に達成すべき目標値を定めるとともに、少なくとも5年

ごとに、目標の達成況等の調査、分析及び評価を行い、必要があると認めるときは、医療計画を変更するものとする。

2. 医療計画について（通知）

健政発第 689 号（H10.6.1 発令）として発令後、4 度にわたる一部改正が行われている。最新の通知は、平成 18 年 6 月の医療法改正を受けて改正された、「医政発第 1227018 号」。この通知に、国が医療計画について都道府県に示す「策定指針」があり、医療計画の推進体制等についても示されている。

3. モデル計画医療計画及び医療計画作成ガイドラインについて（通知）

医政指発第 0222001 号（H18.2.22）によって、医療計画制度に関する学識経験者の下で検討された案を基に作成されている。

①モデル計画（管理に係る部分の抜粋）

第 4 章第 3 節 医療計画の推進体制と役割

第 4 章第 4 節 数値目標の進行管理

1 進行管理の方法

- ・ PDCA サイクル
- ・ 達成までの期間
- ・ 達成までの方策（予算、政策融資、診療報酬など）

2 進行状況の広報・周知方法

- ・ 広報誌・インターネットなど

第 4 章第 5 節 評価と検討

◇数値目標の達成状況を評価し、全国の状況を勘案し、次期医療計画の作成に向けた新たな数値目標を検討

◇数値目標が未達成であった分野や全国平均を大きく下回る分野については、次期医療計画の作成に向け、改善方策を検討

②医療計画作成ガイドライン

I はじめに

II 医療計画の作成に向けた政策立案の流れ

1 医療計画作成の準備

2 医療計画作成までの過程

- 1) 基本的な情報の収集と整理
- 2) 課題の抽出
- 3) 課題分析 (必要な医療資源の把握、医療資源の確認)
- 4) 解決方法の検討
- 5) 解決方法の決定
- 6) 最終確認と意思決定
- 7) 事業の実施と評価

Ⅲ おわりに

2. 医療計画に係る評価の必要性

従来の医療計画については、そもそも計画が目指すべき目標が明確でないばかりでなく、これを実現する手段や関係者の役割も明確でなかった。そのため、既に改訂を重ねている医療計画については前回の計画に関する評価が十分でなく、結果を次期計画に活かそうという流れが確立されていなかった。その大きな原因としては、評価に不可欠な定量的な数値目標の掲載が困難だったため、定性的、主観的な評価のみになりがちであったことが挙げられる。

新たな医療計画においては、上記第1節作成マニュアルにおいて示したような評価項目の設定を行うことにより、定量的な評価に耐えるもので、次期計画への施策の反映ができ得る評価方法の確立を目指すものである。

*

また、評価の際には、県内部での評価のみならず広く県民参加を促した外部評価の実施や、予算編成に活用することによる効果的な資源配分の実施、都道府県間での数値目標の評価情報の共有等、もっと幅広く評価を活用していく取組が求められる。

3. PDCA サイクルによる管理

各都道府県の各種計画、とりわけ「総合計画」の管理においては、その施策・事業についての行政評価（政策評価）※が平成14年度以降開始されており、その基本的な考え方として「PDCA サイクルマネジメント」（計画 Plan—実施 Do—評価 Check—改善 Action）がある。

一方、医療計画については、多くの都道府県においては、計画 Plan—実施 Do のみが重視され、評価 Check—改善 Action が十分行われてこなかった経緯がある。これに対して、新計画においては、明確な数値目標の設定が期待されており、国が事業ごとに示す「指標」及び「代理指標」（詳細は別章に記載）を基に、都道府県の地域特性を踏

また独自の指標を加えることが想定されている。

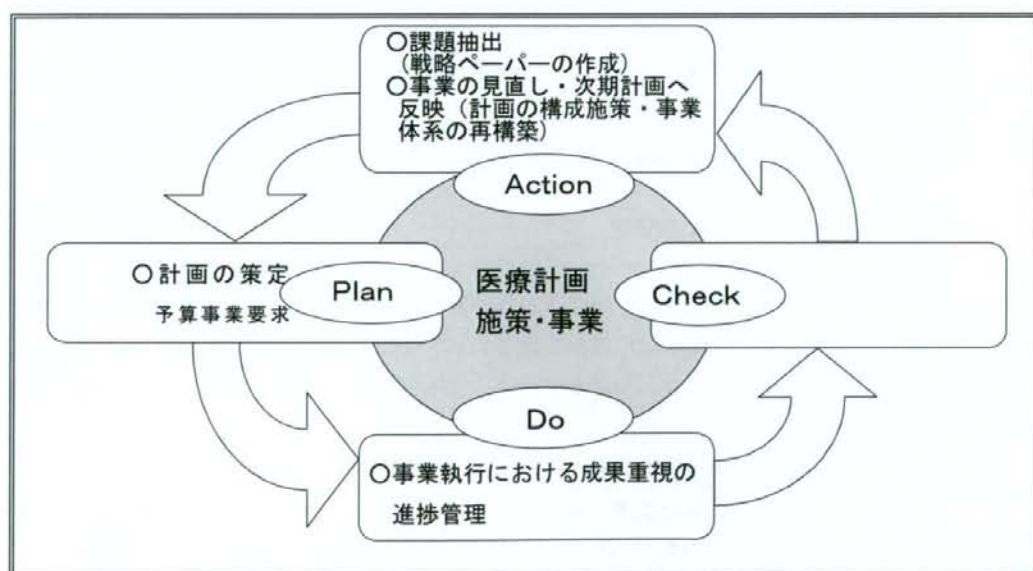
このためには、まずこうした PDCA サイクルを、医療計画を策定段階から進捗管理を行う過程に至るまでトータルで確立することが必要である。医療計画を支える事業、施策（事業の集合体で、事業の上位概念）、政策（施策の集合体で、施策の上位概念）の整理を行い、このマネジメントサイクルを行政活動に埋め込むことが求められているといえる。

1.行政評価及び政策評価の用語の明確な定義については確立されていない

本マニュアルでは、評価の仕組みに着目して使う場合を行政評価、個別の事業・施策の評価に着目する場合に政策評価という用語を用いることとする。

<参考>

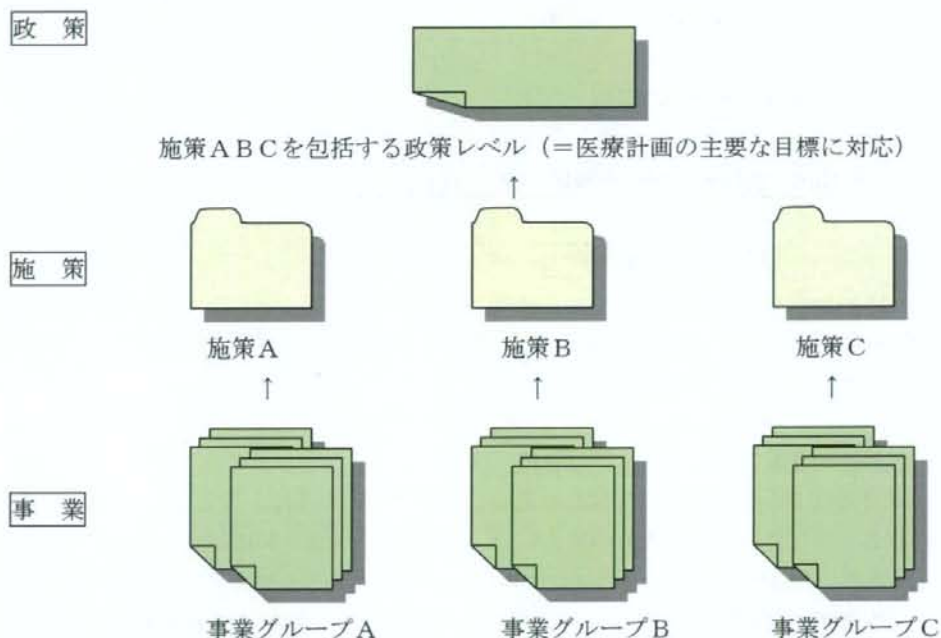
- ・行政評価；行政活動の目的を明確にして、活動成果を数値化して現状分析を行い、マネジメントサイクルを行政活動に組み入れることによって、行政の意思決定における評価・改善に至るプロセスを明確化し、また、評価結果を住民に公表することにより行政の透明性の確保、住民と行政とのパートナーシップづくりなどに役立てるもので、行政運営を「経営」という視点から見直し、質的改善を図るための仕組み。【監査法人トーマツ Service Line Report 2003 コラム vol3 参照】
- ・政策評価（Policy Evaluation）と行政評価（Performance Measurement）
「事業評価」の3つに整理されることが多いが、施策評価と事業評価をあわせて「行政評価」と呼び、政策評価と区別することもある。これは、政策形成と行政執行は本来別々に行われるべきもの、という考え方に基づいている。【ひろしま自治人材開発機構 HP 参照】



全ての都道府県は、総合計画をはじめとする各種計画の中で、既に行政評価システムを確立している。医療計画においても、それらと同様な枠組みの中で計画の策定、進捗管理、評価、および見直しを実施することが望まれる（ただし、上記に相当するPDC Aを前提とした既存の行政評価システムがない場合はその構築が先決である）。

通常、計画全体の評価を行う上では、計画そのものの成果を、事業→施策→政策という形で積み上げて評価を行う（総合評価方式を採る場合が多い）。事業単位の評価を参照して、施策単位の評価を行い、さらに最終的には政策レベル（医療計画の軸となる目標に対応するレベル）を評価するという仕組みづくりが必要であり、その手法はいろいろの形が考えられる。本マニュアルではその一例を示すこととする。

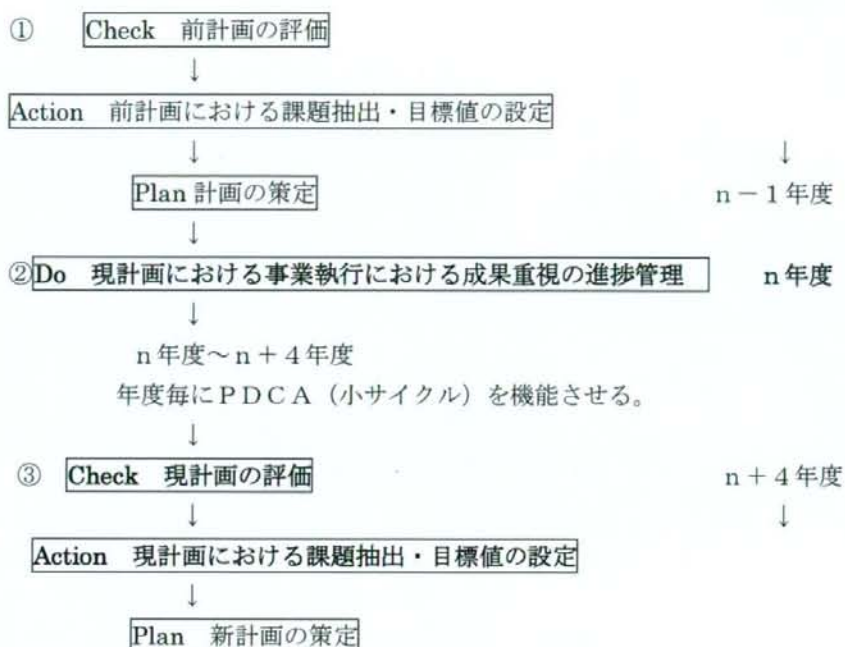
[参考；事業・施策・政策のイメージ]



4. 数値目標の進行管理

計画の管理は、計画期間全体（5年）の大きなサイクルと年度毎の進捗管理である小さなサイクルの稼働を分けて考える必要がある。毎年度の小さなサイクルを有効に機能させることによって、計画は必要に応じて微修正を加えられ、大サイクルをより目標に近づけるべく稼働させるというのがこのマネジメントシステムの考え方である。この中で計

画期間内及び年次ごとの数値目標を明確に整理することで、評価は行いやすくなり、また客観的な説明も容易になる。これを図示すると下記のとおりである。



① 前医療計画の評価・検証 Check～課題抽出等 Action～新計画の策定 Plan
(→作成マニュアル参照)

② 現計画の事業執行における進捗管理 Do

・医療計画は5か年という期間における目標を置くことを主眼とするが、できるだけ、年次ごとの目標を定めることが望ましい。年次ごとの目標を明確に立てることができる、あるいは立てるべき場合は、計画本体に記載することが望ましいが、それ以外の項目を含め、「医療計画管理シート」等を別途作成し、年次ごとの進捗管理を行うとよい。なお、計画本体に年次計画を記載すると毎年度の見直し・改訂が容易に行いにくいというデメリットもあるので、年次計画については適宜別途定めながら、一方で住民に公表するツールを確保しておくことが必要である。(インターネットでの随時公表など) 医療計画管理シートには、年次に併せて、また項目ごとに計画の推進状況を記載できるよう作成すること。

③ 現計画の評価 Check

i) 計画開始年度 (n 年度とする) の翌年度 (n+α 年度 ; 1 ≤ α ≤ 3)

・項目の評価と事業の評価

評価に当たっては、医療計画に示した各大項目※（目標）ごとに、その進行状況及び実績を調査し、評価を行う。

- ・毎年度把握できる指標に係る数値については、毎年度チェックを行う。

<評価方法の例>（→第3章第2節作成マニュアル及び第5章臨床指標等参照）

◇数値目標値を設定しているものについては、 $n + \alpha$ 年度の目標値と進行状況を比較し、進捗率を算出する。

◇定性的な目標を掲げている部分については、評価期間内の変化をできるだけわかりやすい表現で（数値化して）示す。

※ 大項目例；(1)～(6)

大項目の下に適宜中小項目を設け、事業との関連性を明確にする。

(1) 医師確保対策 — 施策 — 事業群

(2) 4 疾患 がん等 — 施策 — 事業群

(3) 9 事業 — 施策 — 事業群

(4) 在宅医療 — 施策 — 事業群

(5) 医療安全対策 — 施策 — 事業群

(6) 医療情報公開 — 施策 — 事業群

- ・評価の方法としては、事務局判断によるばかりでなく、第三者評価を取り入れる（例えば計画策定委員会の評価部会を設けるなど）こととし、客観的な判断を取り入れるよう努めること。
- ・評価の結果はインターネット等で住民に公表し、意見等を求めるシステムをつくっておく必要がある。
- ・評価部会の意見及び住民の意見は、翌年度の事業に反映できるようスケジュール管理を行うこと。
- ・評価に対応した事業の見直し、改善、廃止、新規事業の立案などを行い、翌年度予算に反映させる。具体的には、財政担当部局への当初予算要求の時期（秋）までに、執行見込を予想しつつ、中間評価（仮評価）を完了させる。新規事業については中間評価の結果を持って判断するが、継続事業については、前年度の執行状況等も併せて評価を行うこと。その結果を翌年度の予算要求内容に反映させる。さらに評価対象年度終了後に行う最終評価の結果については、必要であれば当該年度（翌年度に相当）に補正予算を組む等の措置も可能であればとること。



- ・必要に応じて目標値の修正を行い、場合によっては計画本体の一部変更を行うこともシステムとして許容されるよう仕組むことが望ましい。5年間という期間において、住民のニーズや社会情勢が変化することにより、目標の変更をすべきことも十分あり得るからである（例えば、市町村合併によって医療圏の変動がある場合や、大企業の進出等、大規模災害の発生、政策的誘導によって人口の大幅な変動が生じるような場合が想定できる）。

* ・数値目標を分割（例 二次医療圏別、年齢階層別）しての分析や、数値目標相互の達成状況（例 ストラクチャー指標とプロセス指標の達成状況比較等）の検証、類似都道府県との比較等、多角的な検証が求められている。

ii) 次期計画開始年度の前年度（ $n + \alpha$ 年度； $\alpha = 4$ ）

- ・…上図中、②の中の評価 Check に対応
- ・次期計画の策定に向けて、4年間の集大成を行うべく、1年度毎の評価に加え、計画全期間における大規模な評価を実施する。

【在宅療養支援診療所 654 か所の悉皆調査を実施した実例より】

- 今期計画において、悉皆調査等を実施し、現状の把握や指標の設定及び目標値の設定を行うに当たって、その数値を用いている場合においては、基本的には前回と同様の方法（評価の実施のため）によって調査を実施することが必要である。
- なお、在宅医療のような医療計画の中でも新規に盛り込むような事業については特に、計画策定時における現状の把握が十分でないことも多く、また制度変更等の影響を大きいと考えられることから、目標値に対応した実現値の評価については柔軟に行うとともに、目標値自体も随時見直していく姿勢が重要であるとする。

※課題の抽出及び事業の見直し、次期計画への反映については、第4章第2節作成マニュアルの6「現況把握及び目標管理のための指標の設定」以降、平成18年度報告書第5章臨床指標等を参照のこと。